

ランビル公園周辺の土地利用変遷とその背景

地球研 市川昌広

(1) ランビル公園周辺の大きな変化：

ミリ：ミリの発展は1910年の石油採掘から始まる。それまでは小さなマレー人漁村。その後、第二次大戦による戦禍、石油採掘量の減少によりさびれる。1971年の海底油田の発掘開始、1980年代の商業伐採の増加によって再び大きく発展。

道路：1964年のマレーシアへの併合を契機に開発の優先課題となった道路整備。ミリ・ビントウル道路は、ミリから建設が始まり、1965年に現在のランビル公園を通過、1972年ミリ・ビントウル間がつながる。サラワクの道路延長は、1939年の1,090kmが、1966年～1970年の間で760km建設、1972年で1,950km、1996年4,700km(公共事業局管轄道路)。

商業伐採：1950～1960年代、泥炭湿地林のラミンの伐採。丘陵林伐採は、木材価格が上がり、伐採システムが確立した1970年代から。サラワクの伐採量は70年代初めから80年代にかけ急増。1991年に以降、減少傾向。バコン川沿いの湿地林での伐採は1950年代に開始。ランビル公園北部の丘陵林での伐採は1960年代初めから開始。

オイルパームプランテーション：1969年、サラワク初のオイルパームプランテーションがランビル近くのミリ・ビントウル道路沿いに。その後、ミリ・ビントウル間を中心に拡大し続け、とくに1990年代の伸びは著しく、2000年には約30万ha。

ランビル国立公園：1955年、フォレストリザーブ(10,546ha)。1964年、第4省開発計画に国立公園として提案。1975年、国立公園に登録(6,823ha)。

(2) イバンの村の土地利用変遷

入植(18世紀末)～1950年代半ば：バコン川沿いのイバン人は18世紀末からサラワク南西部(現在のスリアマン省、シブ省)からブルック政府の後押しで入植。188年にバラム川流域はブルネイよりサラワク領として割譲。イバン人は、サラワクの財政を支えていた林産物の採集者として、国境を守る住民として期待される。

イバン人は、バコン川近くにロングハウスを建て、そこを中心に開拓開始。焼畑栽培と湿地稲作が日常の糧を得る中心の仕事。コメ以外の野菜、根菜がとれる焼畑栽培が主。バコン側流域のパラゴム栽培は、第二次大戦終了以降に本格的に始められた。サラワク南西部では、1920、30年代にイバン人によって盛んにパラゴムが植えられたが、入植後間もないバコン側流域では、野生ゴムのジュルトン採集が盛んであったこともありパラゴム植栽は遅れて始まった。野生ゴムはバコン川沿いで、村から近い華人商人集落に売られた。当時は川が交通手段であった。

1950年代半ば～1980年代半ば：1950年代後半からコメがマルディやミリの町、商業伐採キャンプで売れるようになった。1970年代以降、バラム川流域に伐採キャンプが林立し、コメの需要がさらに増えた。イバン人の村々では、商品米の増産のため湿地稲作の面積を増やした。一方、焼畑の規模は小さくなる。湿地稲作では、村を流れる川に沿って田を作ることにより収穫の運搬が楽にでき、散播により広いところに人手をかけずに植付けできる。パラゴムのラテックスの値は、朝鮮戦争(1950～1年)時をピークに1970年代半ばまで上下。この時期は、湿地稲作とパラゴム栽培がおもな生業。一方、ミリが発展し、ミリ・ビントウル道路の交通量が増えてくる1970年代初めになると、バコン川沿いの村々にとって、川を通じた川沿いの華人集落よりより、道路によるミリの商人とのつながりが重要となる。道沿いやミリで村の生産物を徐々に売ようになる。道路へのアクセスのよい場所に移ったロングハウスもある。

1980年代半ば以降：安い輸入米により、地元米の伐採キャンプへの商品としての価値は低下。

湿地稲作の規模は縮小。道路を使いミリに食用林産物、籐籠、果物、家禽、川魚などの村の生産物を運び売らようになる。村によって商品は少しずつ異なる。湿地が広い村では、コメを作り、ミリで地元産高級米として小売り。コショウは1980年代以降、何度か高値をつけ、栽培が盛んになる。ミリでは建設関係の仕事が増える。村からの出稼ぎが増え、長期化した。1990年代末からは、村びとがオイルパーム園を作り始める。